



嶋田 泰夫

SHIMADA Yasuo

阪急電鉄代表取締役社長
関経連副会長

談論
風発
INTERVIEW

「文化」と「観光」の両輪で、 広域観光を盛り上げたい



この度、関経連の副会長を拝命し、都市・観光・文化委員会を担当させていただくことになりました。当社グループは鉄道会社として100年以上まちづくりに携わっており、グループの事業に関連した委員会を担当することになり、責任の重さをひしひしと感じています。

現在、当社グループでは、大阪梅田駅周辺の再開発プロジェクト「芝田1丁目計画」(大阪新阪急ホテル・阪急ターミナルビルの建て替えと阪急三番街の全面改修)の検討を進めています。今春、グラングリーン大阪の南館がオープンしたこともふまえ、本プロジェクトをきっかけに、梅田地区全体の国際的な競争力をさらに高め、このエリアを世界と関西とをつなぐ国際交流拠点にしていきたいと考えています。梅田、ひいては関西全体をアップグレードしていくにあたり、私どもの果たす責任は非常に大きいと思っています。

そして、十三～新大阪間を結ぶ新大阪連絡線と、十三～大阪(うめきた)間を結ぶなにわ筋連絡線の構想もあります。まちづくりを主導する企業として、都市・観光・文化委員会のテーマの一つでもある民間開発の機運醸成にも貢献できればと思います。

また、当社グループが力を入れてきたのが、「教育・文化の豊かなまちづくり」です。宝塚歌劇団の本拠地である宝塚大劇場や、梅田芸術劇場はその一例ですが、私は、「文化」をコンテンツととらえ、このコンテンツをどう展開し、産業として育てていくかが非常に重要だと考えています。関西には多くの劇場、ホールがあり、歴史的にも多くの方がそうした文化を楽しむ土壤があり、大いに可能性があると思います。「観光」も一つのコンテンツと言えますから、例えば、アニメに登場するスポットを実際に巡る、いわゆる「聖地巡礼」や、宝塚歌劇を本拠地の劇場で見るために関西を

訪れるといったような、「文化と観光の融合」にも大きな可能性を感じています。

特に観光は、関西経済の底上げにつながる大きな産業に成長する可能性があります。関西はもともと交通網が充実している地域ですが、今後、神戸空港の国際定期便の就航や北陸新幹線の延伸、リニア中央新幹線の開業といったインフラの整備が進めば、より利便性が増し、国土軸の西の中心として、今以上に人が集まるようになるでしょう。関西を起点に、瀬戸内や山陰など、各方面の見どころを周遊するような広域観光もさらに盛り上げられればと思っています。

大阪・関西万博も開幕まで1カ月ほどとなりました。前回の大阪万博の時、私はまだ幼稚園の年長でしたが、太陽の塔の内部を見た際の記憶は今も鮮明に残っています。今回、当社グループは、ロボット工学の第一人者・大阪大学の石黒浩教授がプロデュースするシグネチャーパビリオン「いのちの未来」に協賛し、その共創プロジェクトにグループの若手社員が参画させていただきました。会場にも多くの若者が訪れています。こうして若い方々が最先端の技術に触れ、命について考える機会を持つことは、これからの日本を担う人材の育成という観点からも大変意義深いことだと思います。また、万博を機に移動や交流が活発になり、コロナ禍以降、遠出を避けておられたご高齢の方々も公共交通機関を使って外出されるようになったようです。人が動けば経済も活性化しますので、その点でも万博の効果は期待以上ではないかと思っています。

バリアフリー化の促進、環境に配慮した交通インフラの整備など、鉄道会社としての社会的役割をしっかりと果たしつつ、「三方よし」の精神で都市・観光・文化の振興に一層努めていく所存です。

(談)